




## 授業を考える(1)

・・・考えに光を立てる・・・

2年生の算数の授業を見る機会がありました。問題は、「わたしはどんぐりを18こひろいました。先生はわたしより4こ多くひろいました。先生は何個ひろいましたか。」というもの。答えは容易に出せるのですが、子どもにつけさせたいのは思考力です。紙テープのような長方形の図  を使って答えがどこにあるかを図に表す学習です。1年生のおはじきや絵を使って考える学習から進んだ学習で、子どもにとってわかりやすそうでは実は難しい学習です。この学習をていねいにしておけば3年生、4年生、そして5年生の割合で使う線分図につながります。さて、子どもたちの考えはわたしの図の横に先生の4この図をくっつけたものでした。一方、わたしと先生のテープ図を別々に上下に並べた考えもありました。その良さを説明するのですが、横の図の方がいいとほとんどの子どもが言います。先生の数を求めるわけですから横に4こくっつけるのがわかりやすいと言います。少数派も多数派もお互いの考えを主張して時間切れとなった次の日。教師はどんぐりの絵を18こ、テープ図のところに一つひとつ張り付けてわたしの18こを取り除きました。先生のどんぐりは4こになってしまい、これを起点に子どもの思考が動き出しました。横に並べると2人の取り合いになってしまう、上下に2つ並べるとわたしと先生の数をはっきりする、1列にするのであれば先生のテープの上にわたしのテープを重ねてみればいいと、思考を働かせる学習になりました。

1年生の授業を後半の数分見ました。国語「スイミー」(レオ・レオ二作 谷川俊太郎訳)を教材に登場人物を見つける学習でした。中心人物のスイミーをはじめ恐ろしい敵を追い出す魚たちの物語で、登場人物は見つかったようですが物語の中盤に表現された海の中を彩るくらげやいせえびたちは登場人物かどうか疑問になり、話し合っているところでした。ひとりの女の子が多くの子と違って登場人物だと言いました。にじいろのゼリーのようなくらげと書いてあり、スイミーがくらげを見てそう思っているのだからと根拠を話すのですがそれがほかの子どもに伝わりません。そうかと気づく子どもがひとりいましたがどう言えばいいかと迷っています。ほかの子どもは考えが違ってくらげやいせえびは何もしていないという考えです。教師は女の子にもそうかと言う子どもにも、そして、すべての子どもに、「それで」「ということは」と子どもの発言に応じて思考を促します。ほとんどの子どもたちは女の子の考えと違っているのですが、みんなで女の子の考えを理解しようと考えこんでいます。しばらくして、ある子どもがくらげやいせえびは何もしていないけれどスイミーはくらげたちを見てだんだん元気をとりもどしたと書いてあるのだから登場人物だと言いました。この考えに触発されて「たしかに、スイミーの心が動いたから登場人物だ」と、思考力が働く学習でした。

教師が深い教材研究をすればその分、子どもの考えを使って思考を高めていけると確信した授業でした。学校では子どもが問いをもって思考を高める授業をしています。ひとりの考えも無駄にしない授業です。授業とは、教師が指導するだけのものではありません。授業は子どもの考えに光をあて、考えが子ども一人ひとりにめぐりめぐって思考力を高め、深い理解になります。